

「秘密法ミュージカルを神奈川に呼ぶ会」主催の **The Secret Garden** を見て

義弟が「秘密法ミュージカルを神奈川に呼ぶ会」の事務局長を引き受けています。彼はこのミュージカルを成功させようと懸命に働いてきました。そして、8月21日、22日に、藤沢市の湘南台文化センター内の市民シアターで上演。開場前から、列ができ、かなりの観客と共に私も楽しみました。

このミュージカルは2013年に成立した「特定秘密の保護に関する法律」に違反して検挙された一般市民の法廷ドラマの形を取っています。時代設定は未来の20XX年、場所は原子力発電所のある田舎町、被告人は原発見学ツアーに行った町内会の人たち、罪状は原発内で見学した時に取った写真をネットで公開したため、秘密を漏えいした疑義によるものです。

原発で派遣社員として働く若い男性は、友人の女性に好意を寄せていて、彼女の家族を中心とした町内会の見学ツアーで、余分にサービスをしたものの、喜んでもらっただけ。一体何が秘密であったのか、理解できない。会社側は、外部の人間が、秘密が何かは秘密だが、国家または企業の秘密としているものを公開した事実はあると主張する。弁護士はツアーの市民に違法性を見いだせず、一体秘密とは何かを明らかにしようとする。検事は国家、企業が秘密として決めているものが侵されたとしているから、法に違反すると主張する。裁判官はその両面の問題を斟酌するという法廷の戦いを、東京の劇団「ミュージカル・ギルドq」による歌、ダンスという手法で、コミカルに、実はシリアスに訴えようとしています。被告役の俳優たちは生き生きとした庶民の感じを上手に表現していました。

権力側が秘密と決めたものを漏えいする者を処罰しようとするケースは先般のアメリカのウィキリークスの「盗聴」暴露で明らかになりました。権力者側には都合の良い、しかし、恥ずべきことを秘密としているのです。「特定秘密保護法」は安全保障に関係する政府の機密情報保護とのことですが、政府、官僚、大企業が、何を秘密にするかを決め、その範囲を拡大し、期間を延長し、罰則を広げるのが自在であれば、国民の権利を侵していきます。「主権在民」によって成り立つのが国家ですから、国民は国家の情報を自分のこととして知る権利があります。秘密を知ろうとする人をスパイ、非国民として罰した過去の歴史が、かえって真実を覆い隠し、国民の不利益になったことは明らかです。



「防諜かるた」の箱(『国民六年生』1941年新年号付録、小学館発行)

「高いところからうつすな写真」「怪しいとらんだ人は警察に」など、幼い子ども達にまで、見ざる、言わざる、聞かざるを教え、真実を知ることが許さなかった戦前から、70年を経ました。今また、特定秘密保護法によって、権力の思い通りに国民を支配しようとしているのが、安倍政権ではないでしょうか。このミュージカルは秘密保護法の恐ろしさ、愚かさを伝えていますが、作者は、さらに安保法案で、このミュージカルの世界が現実化しているのに驚いています。

実は、原発見学した市民が秘密とされているものを探るために、見学ツアーに参加し、秘密を見たと言う事実が判明します。その秘密とは原発の中で、核弾頭が作られていて、保管されているということだったのです。国、企業の安泰のために、裁判官も検事も、この秘密の中身を明らかにすることが出来ません。秘密は伏せられたまま、原発の元派遣社員は無罪、特定秘密保護法により、秘密を探る目的で見学した市民たちは6年の刑ということで幕になりました。秘密保護法があればこうなるのです。恐ろしい秘密は秘密のままでいいでしょうか。弁護士は「たたかいはこれからだ」とひるみません。

以前、原発見学ツアーに参加した友人が、模型を見せられながら「いかに原発が安全で、クリーンなエネルギーか」という説明を聞かされたので、原発事故が起きた時には非常にショックを受けたと言っていました。秘密は嘘を生み、人を貶めるのです。後の祭りにはできません。